



さとのかぜ No. 155

千葉県いすみ環境と文化のさとセンター

4月号 2008年4月1日発行

編集・発行 千葉県いすみ環境と文化のさとセンター

〒298-0111 千葉県いすみ市万木 2050 番地

TEL 0470-86-5251 FAX 0470-86-5252

URL <http://www.isumi-sato.com/>

備蓄可能なバイオマス・木炭



<『炭焼きに挑戦しよう』より>

◇肥料でも農薬でもない木酢液の効用は？

木酢液の効用は、「木酢液には、直接作物に吸収されて栄養となるような成分はわずかにしか含まれていない。また、直接的に働く殺菌・殺虫物質も少量しか含まれていない。木酢液は肥料でも農薬でもない。にもかかわらず木酢液を上手に使いえば、肥料の吸収がよくなったり、病虫害が減ったりする。木酢液が発根を促したり、土壌の養分環境を整えたり、土の微生物相を変えたりするからである。」ということです。

<引用文献 岸本定吉監修「木酢・炭で減農薬 使い方とつくり方」農文協編>



3月のセンター行事

- ・『炭焼きに挑戦しよう』（1日～2日）
- ・『春の星座を見てみよう』（8日）



《『炭焼きの挑戦しよう』》

◇江戸の人口増加と薪炭需要の隆盛

「千葉県自然誌本編8」によると、江戸時代、市中の約6割を消失した1657年（明暦3年）の「明暦大火（振袖火事）」など、相次ぐ大火と市街地の膨脹が、東京湾を挟んで江戸に接する地理的特性と豊富な森林資源を背景に、下総台地や房総丘陵一体では薪炭の生産等を目的とする林業が発展しました。記録によれば、現在の大多喜町の老川地区や西畑地区では、^{わいりんたくぼつ}矮林択伐作業（抜き取り）などの薪炭林の改良や上質の白炭の生産性を高めるための製炭技術の向上が図られたということです。房総丘陵で生産された薪炭は木更津に集積され、そこから百俵積廻船（五大力船）で江戸市中へと運ばれたそうです。木炭については、1874年（明治7年）の63万俵（約9400t）、1906年になると200万俵（約30000t）と増加しており、県内の主産地は、「久留里炭」で知られた君津、次いで安房、夷隅の県南地域と、「佐倉炭」として著名であった印旛、香取であったようです。

◇薪炭産業の衰退

こうして発展してきた薪炭産業ですが、昭和30年代半に始まっている家庭燃料が電気、ガス、石油へと替わったことで一気に衰退への道を歩まざるを得ませんでした。千葉県の木炭生産量の推移を見ると、1945年に労働力不足で61万俵と、戦前の4分の1にまで落ち込んでいたものが、1960年（昭和35年）には93万俵と戦後のピークを迎えました。しかし、この時期を境に、1965年39万俵、1977年にはわずか2万俵にまで急減しました。用途を失った房総丘陵の薪炭林は、針葉樹林化されたり、放置され遷移にまかされたりしています。

◇これからの木炭の需要は？

現在、木炭は暖房用にはほとんど使われなくなりましたが、燃料用やレジャー用として、また、水質浄化用、除臭用、装飾用、土壌改良用、その他に使用されています。国産では需要が満たされないために、東南アジア（インドネシア、マレーシア等）の国々から約2万t（1990年）が輸入されています。今後は、環境問題への関心の高まりとともに、備蓄可能なバイオマスとしてなど、この面での活用が期待されます。

◇ドラム缶焼きに関心高まる！

昨年は、やや参加者が少なかった炭焼きの行事ですが、今年は再び定員を超える希望者があり、関心の高まりを感じました。この中には、リピーターも4～5人いて、自分で焼いてみたが、思うようにできなかつたので再び体験を重ねて習熟したいという人もいて、ただ一時の体験でなく、本気でこの行事に臨んでくれている人がいることに大いに感じ入

りました。炭焼きを実施する当たって準備することは、まず炭材を集めることです。市内で雑木の伐採を行った所を探して分けていただきました。丁度1月ころ伐採して放置してあったので、ほどよく乾燥しておりました。竹も近所から猛宗竹を分けていただき、割って乾燥しておきました。炭窯として使用するドラム缶は、電気工具を用いて蓋の部分を切り、一斗缶が入るくらいの正方形の穴を片隅に開けました。また、反対側の蓋の片隅に直径10cm程の煙突の入る穴を開けて準備しました。

◇天気と風向きがこの炭焼きの決め手

当日は、晴天でほどよく北風が吹き、空気も乾燥しており良い成果が期待できました。諸注意と作業手順などを実物を見ていただきながら説明し、4～5人にグループ分けをしてから作業にかかりました。まず、縦約2m、横約80cm、深さ約30cmの穴を掘り、そこにドラム缶を設置しました。後部の煙突口には、直径10cm、長さ1mの煙突を装着してから全面に厚さ15cmくらいに土を被せ、軽く叩いて固めました。次に、缶内に鉄棒のロストルを入れ、その上に長さ約80cmに切り揃えた炭材をぎっしりと詰めました。また、飾り炭を作るため、木の実などを入れた小缶もセットしました。

前面にドラム缶の蓋をして、焚口用の1斗缶を差し込み上下左右を軽ブロックで固定し、土を被せて継ぎ目を密封しました。次に、焚口で小枝等を燃やして窯内に熱風を送る作業です。炭材に着火すると送風しなくても白煙が勢いよく立ち上げられます。この時、焚口に軽ブロックの穴が通風口になるように置いて、穴一つだけを開けておきます。木酢液の採取装置も設置しました。こうして、夕方、白煙が青く変わった頃通

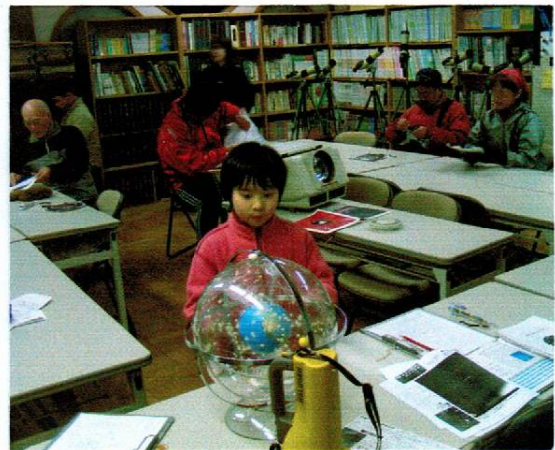


風口の穴を塞ぎ、約30分後に煙突口も塞いで、翌日の午後まで放置しておきました。

翌日は、皆、期待を胸に感動の出炭です。飾り炭もでき、木酢液も採取できました。炭と木酢液等を均等に分け合って、達成感に浸りながらの帰宅となりました。（渡邊美利）

《『春の星座を見てみよう』》

天气に恵まれてシーイングは良好です。最初に星座等の説明をした後、外で惑星や星座の観察です。春の星座といってもまだ3月、オリオン座やおおいぬ座、こいぬ座、おうし座、ぎょしゃ座、ふたご座等の冬の星座がよく見えました。しかし、午後9時を過ぎると、うしかい座やおとめ座などの春の星座も東の空に観察することができます。惑星では、火星がふたご座に、土星はしし座に輝いているのを望遠鏡で観察しました。特に、土星のリングを望遠鏡で見た時は、大人も子供も大きな歓声を上げていました。（渡邊美利）



和泉-日在浦だより春爛漫



ハマエンドウの若葉立つ(和泉浦 3/18)

春爛漫です。

[海浜植物芽吹く]

冬の間緑を欠き殺風景だった砂浜に、海浜植物の姿が戻ってきました。3月中旬以降、海岸に堆積した砂の間からハマエンドウ、ハマヒルガオ、コウボウムギ、ハマニガナなどが次々と芽を出しました。砂浜一面にやわらかい緑が新鮮です。コウボウムギは雌雄異株ですが、今の時期最初に萌黄色の雄花の穂が現れてから葉が突き出てきます。雌花が現れてくるのは例年5月中旬以降になります。

[桜咲く]

毎朝鶯、雉、ヒヨドリなどの啼声で目覚めます。日在地区では3月17日にヒカンザクラが咲き始めたのに続き、ソメイヨシノが25日に開花しました。わが家近くの道端の藪椿は、冬の寒さで開花が遅れ最近やっと満開になり、毎朝辺り一面に落ちた花卉を箒で掃くのが日課となっています。畦道にホトケノザ、ヒメオドリコソウ、ナズナ(別名ペンペン草)などが咲いた田んぼは耕運機で耕され、はや水が湛えられています。コブシ、コナラ、柳などの新緑も鮮やかでまさに



渚一面に潮の泡寄せる日在浦海岸 (3/12)



カルガモの低空飛行 (三軒屋3/7)

[波の華ともお別れ]

厳寒に見舞われたこの冬のシーズン中、浜辺ではしばしば波の華が観察されました。2月以降、藍藻が加わった汽水域の水は淡黄色となり、冬の荒波が浜辺まで寄せてきて4kmの海岸一面が泡立ちました。できたばかりの泡が浜風に流され次々と砂浜を滑走する様子をしばしば面白く眺めましたが、陽射しが暖かくなりもうそれともお別れです。

[冬鳥の旅立ち近く]

ヒドリガモ、コガモ、カルガモたちは干潮時には日在潟の干潟の泥に浸かりながら餌を啄み、旅立ちに備え朝晩編隊飛行を繰り返すようになっています。鴨の仲間では、数百羽のカルガモが留鳥として周年夷隅川流域の汽水域に生息しています。バードウォッチャーから燕を見たご連絡がありました。

[森谷 淵 (もりや ふかし)]

◎今、いすみでは???

いよいよ、春真盛りです。今、いすみの里では、白、黄、ピンク、または、赤紫や濃い紫の色をした野草が咲き始め、大変にぎやかになってきました。その上、樹木では、モクレン（モクレン科）やコブシ（モクレン科）の満開になった白い花に加えて、いよいよ、薄いピンク色のサクラの花が咲き始めました。道の脇の山からは、キブシ（キブシ科）も薄黄色の小さな釣鐘形の花を房状にぶら下げて、人の目を引いています。

サクラは、センター地区では駐車場入口からの道を奥へ進むと万木堰にぶつかりますが、道路脇の敷地に、約20本程あるソメイヨシノも咲き始め、堤防の東側を見れば、ヤマザクラが咲いています。センター内で、バーベキューなどに使うデイキャンプ場の脇の山には、大きなサクラの木があり、このオオシマザクラも咲き始めています。

センター地区内で、花の咲いている野草を探すと、白系では、・タネツケバナ（アブラナ科）、・ウシハコベ（ナデシコ科）、・オランダミミナグサ（ナデシコ科）、・グンバイナズナ（アブラナ科）等が、黄系では、・セイヨウタンポポ（キク科）、・カントウタンポポ（キク科）、・オオジシバリ（キク科）、・ハルノノゲシ（キク科）、・スイセン（ヒガンバナ科）、・ヘビイチゴ（バラ科）等が、赤紫、紫、赤系では、・オオイヌノフグリ（ゴマノハグサ科）、・タチツボスミレ（スミレ科）、・ホタルカズラ（ムラサキ科）等々が見られます。これらが小さな群落を作っている所もあって、いよいよ春真盛りです。

（芝崎昌彦）

